

## 東海道五十三次

JJ1SXA/池

五畿・七道とか、五街道について調べて見ました、五畿とはですが、その前に畿内(きない)です、王城、皇居などのある首都周辺の特別区域の名のことで、日本では、「山城(やましろ)」「大和(だいわ)」「河内(かわち)」「和泉(いずみ)」「摂津(せつつ)」の5か国の総称とのことで、次いで、七道は、「東海道」「東山道」「北陸道」「山陰道」「山陽道」「南海道」「西海道」のことでしたが、五街道という言葉も有ります、こちらは、江戸時代に整備された、「江戸・日本橋」を起点に伸びる陸上幹線道です、「東海道」「中山道」「日光街道」「奥州街道」「甲州街道」の五つの街道の事です。

本題の「東海道五十三次」です、この「東海道五十三次」は、十返舎一九の滑稽本「東海道中膝栗毛」の弥次郎兵衛と喜多八、いたずらを働いては失敗を繰り返し、行く先々で騒ぎを起こす、弥次さん喜多さんの珍道中で有名だ、東海道中膝栗毛ですが、「栗毛」は栗色の馬、「膝栗毛」とは、自分の膝を馬の代わりに使う、つまり徒歩旅行のことである。

日本橋を出発して、最初の宿は、「品川宿(しながわしゅく)」だ、「品川宿」に絡む話、品川生まれ、品川育ちの人は、「江戸っ子」では無く「品川っ子」との自負を持っているようだ、「泉岳寺から向こうが江戸、こっちは品川」と嘯く。

どんどん進んで、相模国に入れば、「戸塚宿(とつかじゅく)」が最初の宿で、箱根八里の「箱根宿(はこねじゅく)」を越えれば、伊豆国「三島宿(みしまじゅく)」で、次はもう駿河国で、最初の宿は「沼津宿(ぬまずじゅく)」、どんどん進んで「島田宿(しまだじゅく)」を過ぎれば、遠江国の「金谷宿(かなやじゅく)」となる、「白須賀宿(しらすかじゅく)」になれば、そこはもう、三河国、「鳴海宿(なるみじゅく)」になれば、そこは尾張国、次の宿を越えれば、伊勢国の「桑名宿(くわなじゅく)」、「土山宿(つちやまじゅく)」になれば、そこは、近江国、53番目の宿「大津宿(おおつじゅく)」に到達すれば、次は、ゴール、山城国の「三条橋」だ、日本橋から京まで、一般的に、徒歩で13日から15日前後かかっていたようだ、通常では考えられない早さだと言われる、忠臣蔵の2挺の早駕籠(駕籠1挺に担ぎ手4人に引き手と押し手で6人1組が宿場毎に交代)は、江戸からわずか4日半で、赤穂に辿り着いた、提灯の明かりで、暗い夜道もひた走ったのでしょう、当時の東海道は、多くの山坂があり、砂利道、泥道、夜は真っ暗闇、そんな中、約600kmを平均時速6km位で走破したようだ、映画などでは、早馬でという設定もあるが、馬では暗闇を走れない、平均時速6kmは遅いようだが、条件を考えれば、この早駕籠は早かったのだ、乗っていた人は半死半生だった。



歌川広重・東海道五拾三次之内「日本橋」と「京師」(ケイシ…京の都のこと)